

2017 12/12

No.2056

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



サッカーの明治安田生命 J1 リーグは 2 日、川崎フロンターレが勝ち点を 72 に伸ばして引き分けた鹿島アントラーズと並び、得失点差で上回って悲願の初優勝を果たした。



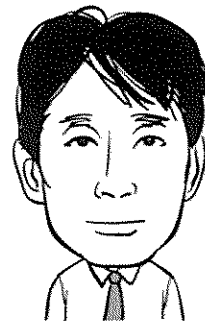
contents

視点・点描	3
若き力で地域課題解決へ	
講演録	4
最新の朝鮮半島情勢を読む 拓殖大学大学院特任教授 武貞 秀士	
国際	8
「イノベーション国家」を目指す中国 デジタル経済の発展に注力	
社会	10
未来の自分から今を見つめる 中長期経営計画策定のヒント	
政治	12
「謙虚に丁寧な政治を進める」 自民・岸田政調会長講演	
くらし2017	14
特別料金の病院が増えると…	
企業最前線	16
成長続く美容家電市場 各社、品ぞろえ強化	
広告珍談	18
広告はたのしい⑤③ のれんをほこる—信用の看板なり	
NNAアジア経済レポート	19

事務局だより

◇2018年1月定例講演会
2018年1月22日(月)
午後1時30分～3時
横浜ベイシェラトンホテル&
タワーズ5階「柏」
講師は東京大学名誉教授、時事
放談キャスターの御厨貴さん
演題は「明治150年後、平成
30年後の政治を展望する」

視点 点描



若き力で地域課題解決へ

角を開墾。ナス、ダイコン、ミニトマトなどを栽培し、調理実習の食材として使っている。

限定的ながら完全循環型のシステムを校内で構築した同大はこの秋、廃棄物処理と並んで深刻な社会的課題となっている空き家を改修した家屋にキエーロを設置した。近隣の住民ら50人以上を招いて地場産の魚で作った料理を振る舞い、調理の過程で出た生ごみをキエーロで処理。ここでも循環型社会の地歩を築いた。

横須賀市追浜南町に所在するこの空き家を改修したのは、同大学人間環境デザイン学科の学生。京急線追浜駅から徒歩5分という立地だが、階段を上らないと到達できない。築70年程度で2年ほど空き家になっていた物件を所有者の了解を得て大規模改修（リノベーション）した。

空き家は全国的な問題になって

いるが、横須賀市は深刻さが際立っている。軍港や造船所の街として発展したが、平地が少ないため斜面地を宅地として開発し、車が通れる道路から長い階段を経る住宅が多い。高齢化に伴い居住者の移動が困難になり、空き家化が進んでいるからだ。

車で入っていけない地域の住宅地にキエーロを置き、足腰が不自由になった高齢者らのごみ出しの負担を軽減したいという試みは、同市の浦賀地区でも始まっている。だが、町内会の主導で、まだ前段階の状態だ。

ごみ出しが負担になるのも、空き家が増えていくのも、根っこにあるのは高齢社会の存在だ。高齢化に起因する地域課題の解決に学生が乗り出す様は心強い。今後の展開がとてもしみだ。

（神奈川新聞社報道部長

渋谷 文彦

完全循環型社会の胎動が、この地で始まっている。生ごみを堆肥に変えて野菜を栽培。その野菜を調理し、出た生ごみをまた堆肥に変えるというサイクルが、キャンパスで行われているのだ。

舞台は関東学院大学（横浜市金沢区）で、活用しているのは当欄でも2年前に紹介した葉山町発祥の生ごみ処理器「キエーロ」。火

力も電力も薬品も使わずに自然の力だけで生ごみを消せ、愛用する首長から「世界を救う」とまで言われる処理器で、同大は2014年から普及に向けた取り組みを開始。昨夏からは、調理実習で生ごみが出る栄養学部でも活用を始めた。同学部ではさらに、管理栄養士を目指す学生や教員が校舎脇の一

のれんをほじる——信用の看板なり

「のれんに腕押し」とは、しっかり話しても相手に手ごたえがないこと。

「のれんを下ろす」とは、店じまいのこと。閉店であり、廃業でもある。

「のれん師」とは、手練手管のずるい商人。どこにでもいるぞな。

「のれん分け」とは、長年けんめいに働いた従業員を独立させ、おなじ屋号を名乗らせたり、資金援助して商品を貸したり、顧客を分けたりすること。のれんを汚したり、のれんにツバをひっかけたり、とんでもないヤツもいる。

のれんは暖簾・幅簾・布簾と書いて、のんれんとか、のうれんと読んだ。もともとは、冬のすきま風を防ぐために掛けた布であった。かつて京都でも江戸でも、大き

な店舗といえば呉服屋。「世の中、呉服を商う家では、縞子・緞子・紗綾・縮緬など、高価な品物が店頭や倉庫にあふれている。しかし、入口ののれんにはかならず木綿を使う」と江戸中期の俳人・横井也

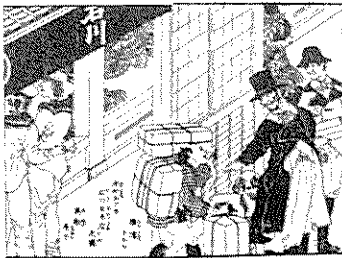
有は書く。絹の高級な染織品をあつかう呉服屋でも、のれんは木綿を用いた。店先には、質素なのれんを掛ける。それは長年の信用を積みかさねた商いの、ほこらしい看板であった。

呉服屋ののれんは「木綿製なり。また地紺、記号および屋号等を白く染め抜くなり」。たばこ屋ののれんは「茶染木綿を用い、他色を用いず」と『守貞謄稿』にある。呉服屋は紺色、たばこ屋は茶色とまきまつていたという。

のれんは長さによって、いくつ

かの呼び名がある。「長のれん」は軒下から地面にとどくほど長く、上は縫いあわせ、下は開いている。「日除け」は長のれんを上下とも縫い合わせたもの。出入りがたいへんだらうに。たんに「のれん」といえば、長のれんより短いもの。「水引のれん」とは、軒下に横に細長くかけた短いのれんのこと。図の左上に黒く、細長い「水引のれん」が掛けられ、「石川」と屋号が染め抜かれている。

この図は、横浜開港から3年後の1862（文久2）年、五雲亭貞秀が『横浜開港見聞誌』に描いた「本町五丁目生糸店之図」である。屋号「石川」は福井藩が地産品の交易をめざして進出するため、横



浜の名主石川屋金右衛門の名籍で開業した。外国人でにぎわう店先。この家で岡倉天心が生まれた。『見聞誌』が出版されたおなじ年である。父親は福井藩の会計係、石川屋をまかされていた。横浜関内のど真ん中、外国語が飛びかうこの店に育つただけに完璧な英語力であった天心について。

18歳で東京大学文学部卒業。文部省に就職。22歳、師フェノロサと法隆寺夢殿開扉。24歳フェノロサと欧米出張。27歳、現在世界最古の美術雑誌『国華』創刊。28歳で東京美術学校長。弟子の横山大観・下村観山などと日本美術院創立。ポストン美術館東洋部長に就任。英文で記した『茶の本』をニューヨークで出版、欧州各国に翻訳されるなどめざましく活躍。51歳で他界した。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）
 （図）五雲亭貞秀『横浜開港見聞誌』より「本町五丁目生糸店之図」